

主日礼拝説教「みんなマンナのお世話になった」

日本基督教団石神井教会 2019年11月17日オープンチャーチ

【旧約聖書日課】出エジプト記 2章1～10節

1レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめぐらした。2彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。3しかし、もはや隠しきれなくなったので、バビルの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。

4その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見ていると、5そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。6開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。7そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」

8「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。9王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ、10その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた（マーシャ）のですから。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章27～35節

27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」28そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、29イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」30そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。31わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」32すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。33神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

34そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、35イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

「パン」をどうぞ！

今日は、「オープンチャーチ」としてご案内してきました。教会員のご家族や知人はもちろん、この地域の方々に一人でも多く、教会に足を運んでいただきたいと、企画イベントも用意して、今日のご案内をしてきました。「教会は敷居が高い」と言われることがありますから、今日は、おいでくださった方に名前を書いていただくことも敢えていたしません。もっとも、礼拝に出席くださる方には、できるだけ記名をしていただいています。それも「オープンチャーチ」ということでおいでくださった方には無理強いしないことにしています。ともかく、どなたにも、教会という場所に親しんでいただきたいのです。

今日は午後、コンサートの企画があります。これまで、クリスチヤンの演奏家を招いてのコンサートを長く企画してきましたが、今回は、「オープンチャーチ」の趣旨に沿って、お招きする演奏者も、教会関係者ではなく、地域の音楽家の方々にお願いしました。信者ではない方々ですが、わたしどもの企画をご理解くださって、演奏していただけることになりました。きっと、午後には、演奏者の関係で新たに教会においでくださる方もあることでしょう。コンサートの準備にも、わたしたちは力を注いできました。

けれども、もっと力を注いできたのは、食べ物の準備です。今年は、ドライカレーのメニューですが、手づくりのお菓子も用意してくださっているようです。毎年、コンサートの来場者数以上に数が出るのが、このメニューです。無料で食べてくださいとご案内するだけで、おいでくださる方が少なくありません。

もちろん、そういう方のことを「食い意地が張っている」などとは思いません。むしろ、食べ物を提供することで「胃袋を掴もう」としているわたしたち教会のほうで、下心が見え見えかもしれない。それでも、わたしは、これを続けてくださるのは、良いことだと思います。いかにも教会らしいことだと思います。教会は、「食事を共にする」ことをずっと大切にしてきたからです。日本の教会だからではありません。二千年前、主イエスの直弟子たちが教会を始めた最初から、教会では「食事を共にする」ことが大切にされてきたのです。

そもそも、主イエスが、弟子たちばかりか誰とでも「食事を共にする」ことを大切にされていました。あまりに分け隔てなく誰とでも食事を共にされたので、周囲からは冷ややかな目で見られたこともあったようです。ときに「大食漢の大酒飲み」と揶揄されることもあったというのですから、もはや単なる宴会好きだったのではないかとさえ思えます。もちろん、単なる宴会好きというわけではなかったでしょう。

主イエスの出来事を伝える福音書は、ある野外での食事の場面を伝えています（ヨハネ 6 章ほか）。何千人もの人が野外で集まって、主イエスのお語りになることを聞くということがあったのです。日が暮れてきたので、弟子たちはその集まりを解散させようとしたのですが、主イエスは、「ここで皆一緒に食事をしよう」と弟子たちにおっしゃったのです。そして、何千人もの人々にパンと魚を食べさせられたという、不思議な逸話です。

「パンをください」

主イエスのことを「パンを与えてくれる人」と期待して近寄って来た者は、少なくなかったようです。確かに、主イエスは、必要な人にパンを与え、分かち合うということを実践されたのです。教会は、そのような主イエスの振る舞いに倣って、古い時代から、自分たちの仲間の中の貧しい人とパンを分かち合うことはもちろん、社会に出て行って慈善活動としてパンを必要としている人に届けるということもしてきました。今でも、北米の教会では、それぞれの教会の当然の責務として、食事を提供する活動が位置づけられていると言います。日本の教会でも、そのような活動を続けているところがありますし、最近では「こども食堂」のような形での活動を始める教会も少なくありません。

そういうことを教会が実践する必要があるのかと、疑問に思われる方もあるでしょう。そういう福祉的なことは、行政や福祉の専門団体がおこなった方が効果的だし、確実だろうという意見はもつともです。確かに、日頃、教会に食べ物を求めて来られた方があっても、十分に何かを提供できているわけではありません。実際には、そういう専門活動をしているところを紹介し、行ってもらうように案内してお帰りいただくこととなります。

実のところ、主イエスの時代、最初の教会の時代にも、必要な人々に大規模にパンが提供される仕組みは、社会の中にあつたのです。富裕な権力者たちが、定期的にパンだけでなく娯楽も提供する、ということが為されていきました。もともと、ユダヤ人はローマの権力者たちが提供するパンを受け取るわけにはいかなかったようで、ユダヤ人同士の施しの義務が貧しい同胞を助けるという仕組みがありました。それでも、主イエスは自ら人々にパンを与えられ、また、弟子たちの教会も自ら教会外の人々とパンを分かち合うということをしてきたのです。

食べ物を与えられ口にするという経験を、わたしたちは、生まれたときから生きています。生きていく限り、食べ続けるでしょう。貧しかったり、幼かったり、年老いたりして、自分で食べ物を手に入れることができなければ、だれかに与えてもらって、食べ続けるでしょう。食べるのが当たり前なので、わたしたちは、必ずしも食事の経験をすべて記憶しているわけではありません。だれも、はじめて母の乳を飲んだことや、はじめて固形の食べ物を口にしたときのことを、記憶してはいないでしょう。

当然と言えば当然ですが、それは、とても大切なことを意味しているのかもしれない。わたしたちは、自分で稼いで食べ物を得なければいけないという観念をもって生きていますが、本来的には、そうではないということの意味しているからです。わたしたちが生きるのに必要な食べ物は、自分で獲得するというよりは、誰かに与えてもらって、分かち合ってもらって、得ているのです。

今日、オープンチャーチに来られた皆さんに「ドライカレー」を提供するのは、そのことを思い起こしてもらいたいからです。「無料で得た」というだけではない。食べ物が本来、与えられ、分かち合って得られるはずのものと、わたしたちは思い起こしたいのです。

「マンナを食べた」

福音書日課（ヨハネ 6 章）の中で、主イエスとやり取りをしている人が、「わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました」と言っていました。皆さんは、「マンナ」をご存知でしょうか。この人が言っている、先祖が食べたという「マンナ」は、イスラエルの人々がモーセに率いられてエジプトから出て来て荒野を旅したときに、持ってきた食べ物が尽きてしまったところ、神が朝ごとに天から降らせてくださったという食べ物のことです。聖書によると、それは、「コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした」（出 16:31）食べ物だったと言います。甘くて白くてふわふわしたものが想像されます。パンか、それこそウェファースのような菓子だと思って、間違いはないでしょう。その「マンナ（マナ）」が、イスラエルの人々のもとに毎朝、その日ごとの食べ物として与えられたと、聖書は物語っています。それを、人々は、「天からのパン」「神のパン」と呼んだのです。この出来事を、イスラエルの人々は代々、忘れることがないようにと教えられてきたのです。

この「マンナ」は、モーセが自分の導いてきたイスラエルの人々に不平不満をぶつけられたときに、神に願って与えてもらったものでした。老いも若きも、その「マンナ」を食べたのですが、満足したのでしょうか。幼い子供たちは、大喜びだったかもしれません。甘いもの好きの年寄りも、孫たちと共に喜んで食べたかもしれません。けれども、もしかすると中には、満足できない者もいたのではないのでしょうか。「なんだ、こんな子供だましのお菓子なんて」と。

だからかもしれません。イスラエルの人々は、この「マンナ」を神に願ってくれたモーセの誕生物語を伝えているのです。今日の旧約聖書日課（出 2 章）です。モーセが、エジプトのファラオの命令、ヘブライ人と呼ばれる者の男児は皆、ナイル川に流して殺すようにとの命令にもかかわらず、産婆や母親、姉、そしてファラオの王女といった女性たちの機転、また慈しみによって、命救われたというのです。確かに、モーセでなくても、わたしたちも皆、生まれたとき、このような人たちの手によらなければ、その愛によらなければ、食べ物を得るところか、命の危険に常にさらされることになっていたでしょう。そのときには、そのことを知る由もありませんが、成人したとき、知らされ、思い起こすことはできるのです。

「マンナ（マナ）」の出来事を経験する、あるいは、そのことを思い起こすというのは、わたしたちが生まれたとき、幼いとき、何によって生かされていたのかを思い起こすことなのです。

皆さんにも、「マンナ」を差し上げましょう。皆さんが、知らずに食べていた「マンナ」を、思い起こしてください。乳幼児の菓子で「マンナ」を食べた方は、少なくないと思います（1930 年の発売です）。菓子メーカーの創業者が、「マンナ」の逸話に込めて名付けたのだそうです。今日、わたしたちが提供するのは「ドライカレー」ですが、皆さんの「マンナ」を思い起こすには十分でしょう。それは、「命のパン」、「神のパン」なのです。